

## シリーズ・いま、世界の子どもの本は？

### 第5回

#### 第二部 絵本作家として伝えたいこと (要旨)

平成23年7月23日

講師：キティ・クローザー

こんにちは。皆さん来てくださってありがとうございます。そして、たくさん本のあるこの場所にお招きいただきありがとうございます。日本に来られて大変光栄です。以前から日本に来たいと思っていて、仕事で出版社の方に会う度に「私、日本に行きたいの」とずっと言っていました。それを誰かが聞いて、今回うまくお招きいただけたのだと思います。

#### 板橋区立美術館でのワークショップについて

---

この間、板橋区立美術館で一週間のワークショップをして、すばらしい時間を過ごすことができました。この場を借りて、板橋区立美術館の松岡希代子さんに感謝したいと思います。

これまで7年間、いろいろな生徒たちを教えてきました。普段ベルギーで生徒たちに「こうしちゃだめ、ノー」などと言うと、言い返してきて言い争ったり、けんかをしたりしなければならないようなときもあります。でも、今回初めて日本の生徒さんと会ったら、「こうした方がいいんじゃない」と言っても、にっこり笑って「はい分かりました」と言ってくさる。こういうことは初めてでした。そういうことには慣れていなかったので少しくらくらするような体験でした。そういった生徒さんたちと、私が一番大切に思っていることを分かち合いたいと思いました。それはお話を作るということです。

#### リンドグレーン賞やお話、子どもについて

---

リンドグレーン記念文学賞を受賞したとき、私が一人でこの賞をもらったのではなく、これまで存在し、鎖のようにつながっている何万冊もの本のおかげで、自分が今、賞をもらえていると感じました。

お話や絵というものは、男の人や女の人、子どもにとっても酸素の塊のような、ほっと息をつけるものだと思います。お話を読んでいて、素晴らしいな、魔法のようだと思うのは、世界の端と端にある全く別の国で語られるお話であっても、必ず同じテーマや同じことが描かれていることです。それだからこそ、とても強いしっかりしたお話が大事なのだと思います。人間は、火の傍らや洞窟の中、あるいは夜空の下などでずっとお話をしてきました。そうして何かと繋がっていると感じることは人間にとってとても大事なことだと私は思いま

す。

私は人間に興味があります。なかでも特に子どもに興味があります。政治や経済は時に子どもの存在を忘れてしまうことがあります。でもその子どもは成長して必ず大人になります。「大人を相手にして本を描かない？」と、ときどき言われますが、私が持っている「言葉」というのは、もっとも子どもに向けるものだと思います。そして私は、大人の中の子どもにも語りかけています。これから 1 時間半の間、私の仕事、本、イラスト、クロッキーなどをお見せして、その世界を旅していただきたいと思います。

## 生い立ち

私は、イギリス人の父親とスウェーデン人の母親の元にベルギーで生まれました。おかげで子どものころから、スカンジナビアと英国の伝統、それぞれの美しいお話に触れる機会に恵まれました。例えば『秘密の花園』や『ジェイン・エア』、アストリッド・リンドグレーンやビアトリクス・ポターといったものに、ごく幼いころから触れてきました。

家ではよく絵を描いていましたが、特別才能のある子どもでは決してありませんでした。ただ、自分でお話を作るのはとても好きでした。

家ではお父さんとおばあさんがよくお話をしてくれました。この二人は素晴らしいストーリーテラーで、特におばあさんのことをよく覚えています。おばあさんの横に座り、おしろいの匂いを感じてお話を聞いていたのをとてもよく覚えています。

私は、生まれつき耳が不自由でした。そして、私の耳が不自由だと周りが知ったのは 4 歳のときで、補聴器をつけたのは 6 歳のときでした。それまで言葉が話せなかったので、言葉を学び始めたのはたいへん遅い時期からでした。私は耳が不自由だったせいで、周りをもとてもよく観察していました。特に、歩いている人や周りにいる人を見るのが好きでした。どうやって首を傾げるかとか、どう肩を怒らしているかとか、そういう仕草などをじっと見つめて、とても細かく観察していました。

17 歳のとき、私は美術学校へ行っていました。図書館にもよく通っていて、そこで日本の絵画もたくさん見ました。日本の絵は雲、木、岩などをベルギーとは違う形で描き出します。日本の絵がそれらのものをどうやって描き出すのかということに、たいへん興味がありました。そしてそういうものが発するエネルギーにもとても興味がありました。

卒業論文では、私はビアトリクス・ポターの人生について書きました。皆さんも恐らく御存じかと思いますが、ビアトリクス・ポターは、生涯日記を付け続けていました。その日記を通して彼女の人生がどういうものだったかを知ることができます。私はポターのように、自然に大変興味があります。だから、いつか百科事典を書けたら、という夢があります。小さなものばかりの百科事典を書きたいと思います。例えば虫、鳥、草花、雑草のようなものとか。

その後、私は 1 年間デッサンの学校に通い、次に 3 年間イラストの学校に通って、またその後 2 年間、クロッキー、人体を多く描く学校へ行きました。というのも、人の体がどう動いて、どう曲がるかといったことをきちんと描けるようになるのはイラストにおいて大

事なことだと思っからです。その後 5 年間、版画の学校へも行きました。そして最後の学校の卒業試験で、私はクリスチャン・ジャルマンに出会いました。編集者のクリスチャン・ジャルマンは、私の作品をとて気に入りてくれて、一緒に仕事をするこことになりました。そしてそれから 15 年間、ずっと彼女と仕事をしてきました。それはとて素晴らしい経験でした。私は編集者さんと、お互いに信頼関係がなければ仕事できません。お互いのことを賞賛しあったり、尊敬しあったりする部分がなければ、仕事をするこことできません。

## 好きなもの

---

### ・猫とお茶

仕事をするとき、私は二つのものを近くに置いておくのが好きです。それは猫とお茶。お茶は毎日たくさん飲みます。

私は朝早く起きて仕事をするのが好きです。朝型で、大体朝に仕事をしますが、特にとても早い時間だと、頭がすごくすっきり、はっきりします。

お茶とビスケットと本というのは、とて大事だと思います。また、自分の周りにいるんな物をちょこちょここと置いておくのがとて好きです。絵本を 1 冊作り出す前に、私はいつもアトリエをすっかりきれいに片付けます。だんだん少しずつぐちゃぐちゃになっていくのですが、本が完成するまでは、それを片付けません。

### ・人

私は人の表情とか体が表す表情にとて興味があります。人の表情から、その人の内面を読むこことにもとて興味があります。自分が誰かを描くと、絵の中のその人も自分のこことを見ているような気がします。そしてそこに一種のコミュニケーションのようなものがあるような気持ちになります。

私がとて興味があるとっていいものは、人と人との関係です。ある人がどうやって暮らしているかとか、友達とどういうふうには話したり接したりしているかとか、このふたりはどうやって一緒に住んでいるのかなとか。

### ・夜と影

私は子どもの頃から年に 1 回スウェーデンへ行っていました。そしてその光や色などに大変興味がありました。だからこそ、私は自分の絵の中にたくさん影を描き込むのだと思います。私は、夜、見えないものの存在を強く感じます。そしてそれのための場所を、自分自身の内に割いておこうとって思っています。例えば、夢とか創造とかいったものに対する場所です。

子どもが何か自分の中にあるものを投影させるこことできるように、私はよく自分の絵の中のある一角にスペースを空けておくこことあります。

### ・大きなものと小さなもの

私は、とても大きなものととても小さなものを一緒に並べて描くのが大好きです。この絵をよく見ていただけると分かると思いますが、小さい方の男の子は絵本ではなく、文字のみの本を読んでいます。私は子どもが字を読める振りをしているのが大好きです。とてもかわいと思うし、時々本を逆さまにして読んでいる振りなどをしていると、もうたまらなく感じます。

## 作品から

- ***Petits poèmes pour passer le temps* (時間をつぶすための小さな詩の本) / Carl Norac 詩, Kitty Crowther 絵. Didier jeunesse, 2008**

これは友達のカール・ノラックという人の詩の本の表紙です。その詩の中で女の人が電話を取ると、掛けてきた相手は「秋」でした。聞こえる音は、ただ「シー…」という音だけです。

- ***Mon royaume* (私の王国) / Kitty Crowther 作. L'École des loisirs, 1994**

私が初めて描いた絵本です。私は線にたいへん興味があります。太い線だったり薄い線だったり、タッチの違う線に興味があります。

私にとってお話を読むことと同様に、線を「読む」ことはとても大事なことです。子どもというのは、細かいところを見て何が起きているかというのを理解するのがとても得意です。

お話の中で、私たち人間はずっと動物に言葉を話させてきました。そして、そういった動物たちの視線や言葉を通して自分自身を読み取ったり、それらに自分自身を投影したりします。動物を主人公にしたり、登場人物にしたりして本を作ったほうがよく売れるのは事実ですが、実際、私が一番興味があるのは、もっと不思議なもの、本当は存在しないような動物や虫、生き物です。そういうものにとっても魅力を感じています。

私はとても若かったとき、子どもの本のイラストというのは墨と水彩を使って描くようなものだと思っていました。例えばアーノルド・ローベル、ウンゲラー、モーリス・センダックのような作家たちの後ろに自分を置いていました。そしてパステルとかそういったものにあまり興味がありませんでした。

しかし、息子たちが生まれてから格段に時間がなくなったので、水彩で描くのが難しくなってきました。水彩を描くためには、そのまえにまず紙を濡らして、板に張って、暖房で乾かしたり、お日様で乾かしたりしなりません。それが大変になってしまったので、もう少し楽でもう少し荒っぽい、例えば色鉛筆、マジックなどといった、自分の周りにちょこちょこっと置いてあるものを手に取って、絵を描きだしました。他人のイラストで私がとてもいいなと思うのは、いつもとてもシンプルなものばかりです。私自身、テクニックにはほとんど興味はありません。技術というよりも、その作家がその作品の中に何を入れているかということにとっても興味を感じています。

『私の王国』という本に戻ります。これは美術学校では白黒で作りました。そして編集者と、色を着けるべきかどうかということ、何度も話し合いました。

私自身、英語で書かれた英国文学の白黒の挿絵を見て育ちました。しばしば大人は、子どもはきつこういふものを好むだろうという凝り固まった考えを持ちがちです。例えば、線は滑らかな方がいいだろうとか、イラストはできるだけ愉快な方がいいだろうとか。そこで私はこの白黒の絵をたくさんコピーして小学校の教室に持って行き、そこで子どもに色を塗ってもらいました。子どもがどうやって色を塗っているのかを見るのは非常に感動的で、子どもの色の塗り方は実はとても効率的でした。モロッコ人の男の子がまず紙に黄色を塗って、また黄色を塗って、また黄色を塗って、また塗ってと、ぐるぐるぐるぐる描いているので、「もういいんじゃない」と声をかけたら、「いやあ、僕これ大好きなんですよ、マダム」と言われました。

私はすごく色が好きなのです。色の持つハーモニーとか、優しさとか、力とか、そういったものは音楽に通じるものがあると思います。

私は、絵に意味があるということがとても大事だと考えます。ただきれいだとか、ただかわいらしいからとか、そうやってイラストを描くのではなくて、この絵を描くとこの本にどういう意味を与えられるか、例えば、ある人とある人が出会うこととか、この場所からこの場所にはどうやって行くかとか、そういうことを絵で分からせる、絵で意味を表すことができないと駄目だと思っています。

● ***Trois histoires folles de Monsieur Pol* (ムッシュポールさんの三つのちょっと狂ったお話) / Kitty Crowther 作・絵. Pastel, c1999**

私は大人を描くとき、内面がとっても子どもっぽい大人を描くのが好きです。この本の中で、だいの大人のポールさんが泣いている絵がありますが、子どもは「ポールが泣いている、どうして泣いているの」とたずねてきます。今お見せしている本の中では、『長くつ下のピッピ』のような不思議な力を持つ女の子を描きました。

私はお話をつくり始めるときに、お話の最後がどうなるかを全然知らないままつくり始めます。私のやり方としては、一つ文を書いたら一つ絵を描く、一つ文を書いたら一つ絵を描く、というふうに足を一歩ずつ交互に出して歩いていくみたいにして進んでいきます。子どもによく「あなたがお話を作るときどうするのですか」と聞かれると「じゃあ、あなたが遊ぶときどうしているの」と答えます。私は全くそれと同じエネルギーと気持ちで本を作っています。

● ***Mon ami Jim* (僕の友達ジム) / Kitty Crowther 作・絵. L'École des loisirs, c1996**

あるとき私は車に乗って木や枝を眺めていました。そうしたら突然、枝に 2 羽の鳥が留まっているところが思い浮かびました。そしてその 2 羽が、何を話しているかなと考え始めました。

これは 2 羽の鳥の友情のお話です。1羽はとても外交的で、もう 1羽はすごく内向的な鳥です。違いを受け入れることとか、許しあうこととか、そういうことについて書きました。私は美しい声で鳴くツグミが大好きなので、この本にツグミを描きました。この本は、黒いツグミと白いカモメの本で、描き終わってみたら人種差別についての本のようになったのですが、人から「あれ、これレイシズムの本なんじゃないの」と言われるまで、全く気付きませんでした。また、オランダのホモセクシャルの新聞に書評が

載っていて、とっても素晴らしい本だと書かれていました。少しびっくりしたけれど、うれしかったです。

鳥には T シャツを着せてみました。一羽は赤で、一羽はジャン・ポール・ゴルチェみたいになりました。

アメリカで出版されるときに、アメリカの人は鳥がコーヒーを飲むなんて絶対考えられないと言いました。絵本の登場人物がコーヒーを飲むと、子どももマネしてコーヒーを飲んでしまうと考えたようなので、出版社の人と交渉して、結局マシュマロの載ったココアを飲んでいることになりました。

● 『ナイナイとしあわせの庭』 (*Moi et Rien*) (キティ・クローザー作・絵、徳間書店、2002年)

この本は私が初めてフランス語で書いた本です。それ以前の本は、英語で書いていました。というのも私は、家族と家では英語で話していたからです。学校で習うような言葉や本に書かれているような言葉ではなく、子どもがお家で話すような英語を使って、両親と会話をしていました。

英語で書き始めたことの大きな利点の一つが、学校ではフランス語で話していて、英語は普段使っている言葉ではなかったために、非常にシンプルに書かざるをえなかったことです。子どもの本を作ることでとても大事なことというのは、物語の芯の部分だけを持ち続けることです。まずその芯の部分だけをきちんと伝えるということが一番大事なことだと私は思っています。

フランスの作家のミシェル・トゥルニエが、「ものを書くことで一番難しいのは、子どものために書くものである。というのも、言葉と言葉の文字と文字の間とか、行と行の間とか、ページとページの間に、物語らせなければならないものがたくさんあるからだ」と言っています。絵本も同じことで、絵で語っているものは文で書くことはないし、文で語っていることを絵で何度も描くこともないと思います。その二つの関係性というのがとても大事で難しいことだと私は思います。

私はこのお話を 2 日で描き上げました。お話を描くとき、題材が思い浮かぶと、あとは頭が一人で働いています。1 か月とか、2 か月とか、ずっとそれは働き続けていて、あるとき机の前にぼっと座ってペンを握ると、泉のようにさらさらさらっと、それまでずっと頭の中でこねていたものが出てくるときがあります。

この本の場合、最初はとてもおかしい話を描こうと思っていました。そう思って描き始めたら、私の鉛筆が小さな女の子を描いたので、そのままその子について行くことにしました。最初は面白い話を描こうと思っていたのに、この子は全く違う方向に私を引っ張っていきました。よく「これはあなた自身に起ったお話ですか」と聞かれます。答えはノーです。ただ私の友達に、弟さんが自殺してしまった人がいて、その弟さんがいなくなったあとにできた空白がどれだけ大きいか、ということにとても心を揺さぶられ、描いたものです。その人がいなくなることによってぽっかりと空いてしまった穴とか、悲しみとか、メランコリックな気持ちとか、そういうものにとっても心を揺さぶられたからです。

この本はスウェーデンで小学生が最終学年でフランス語を習うときのテキスト代わりに使われています。人生というのは不思議だなと思います。自分がものを書いたり聞いたりすることには耳のせいでも苦勞したのに、今スウェーデンの子どもが私の本を通してフランス語を学んでいるなんて。私は、耳は聞こえなかったけれどもお話を作れたので、そういう不思議が起こったのだと思います。

● ***Le grand désordre* (ぐちゃぐちゃ) / Kitty Crowther 作・絵. Seuil jeunesse, c2005**

私は絵本にメインのお話の他に、イラストの中の隅っこに二つ目、三つ目の小さなお話を入れ込むのがとても好きです。この絵の中でトランプしている二人の登場人物を追っていきましょう。この二人がしているトランプゲームはバタイユ (Bataille)、「戦争」という、息子と私がよくやっている、永遠に終わらないゲームです。私はトランプをしている人の顔を見るのがとっても好きです。すごくうれしそうだったり、何かやけに怒っていたり。

私の家はぐちゃぐちゃなのですが、この登場人物たちがこっそり私の知らないところで家をぐちゃぐちゃにしているのではないかな、と思うことがあります。

この本は、幼馴染のために描いたものです。その人は私と同じくらい家をぐちゃぐちゃにしているんです。私は、例えば誰かがあなたの家を訪ねて来たときに、そこらをちらっと見て「あら、汚いわ」と思うとか、あなたが誰かの家に行ったときに、どういふ基準で汚いとかきれいだとかと思うかなど、そういうことについての絵本を描いてみたいと思いました。

● ***L'enfant racine* (根っこの子ども) / Kitty Crowther 作・絵. Pastel, c2003**

私はここに花をたくさん描きました。でも、それは装飾のためではありません。私は花がどういう構造になっているとか、どんな花にどんな花びらがついていてどんなふうになって、芽が出るのかとかにすごく興味があるからです。少なくともベルギーでは、学校でお花を描くというと、丸を真ん中に描いてピュピュピュピュッと周りに花弁を描く、というような教え方をします。それに似てない花だって数限りなくあるのに、どうしてそんな紋切り型のことが言えるのかと首をかしげることがあります。

● 『**こわがりのかえるぼうや**』 (*Scratch scratch dip clapote!*) (キティ・クローザー作・絵、徳間書店、2003年)

私は黒にとっても興味があります。黒は闇ではなく、むしろ逆にそこから色が飛び出てくるからです。私は日暮れの前の薄闇がとても好きです。そういうときに、ものの周りが少しゆらゆらと揺れているような気がするからです。ものだったり、扉だったり、そういったものが、少しだけ震えているような気がします。

このカエルの絵本のタイトルは「スクリッチスクラッチディックプラポット」という、図書館の人にも本屋さんの人にも親にも誰にも発音できないような言葉です。私は7年間耳が聞こえなかったために発音の練習をしたので、他の人が言うとき「スクラッチ…」となっているのを聞くのは、なかなか愉快です。耳の不自由な人からのささやかな復讐です。

これはやみの恐怖に対する本です。というのも、私は子どもの頃、暗いのが大変怖か

ったからです。最初、やみを怖がる本を作ろうと思ったときに、例えばベッドの下にワニがいる本とか、たんすの中に怪獣のいる本とかを作ろうかなとも思いましたが、自分は実際一回もベッドの下でワニは見たこともないし、怪獣がたんすの中にいたこともないし、少なくともそんな怪獣と友達になったことはないのでやめました。ですから、この本の中ではカエルの男の子が音を何か聞いて、怪物がいるのではないかと想像しています。

● ***Le petit homme et Dieu* (男の子と神様) / Kitty Crowther 作・絵. Pastel, 2010**

これは、死神についての本(『ちいさな死神くん』(*La visite de petite mort*) キティ・クローザー作、講談社、2011年)を描いたので、次は神についての本を描いてみようかしらと思って描いた最新作です。私は今まで、先ほどのカエルのジェロームを除いてずっと女の子を描いてきました。しかし自分に息子もいますし、男の子を使ったお話を描いてみたいと思っていました。この中の神様と、男の人なのか男の子なのか少し微妙なこの人物、その関係は父と子であったり、または父なる神と神を信じる男の人の関係であったりします。

この話は、男の子が森を歩いていて「あるもの」に出会うことから始まります。その「あるもの」というのは、何か得体が知れないけれど別に怖くないものです。男の子(又は男の人)は近寄って行って「あなた誰？」と尋ねます。そうするとそのものは「神だ」と答えます。神だけれど神の中の一人だと言います。「じゃあ、神ってたくさんいるの？」ときかれ、「星の数と同じくらいさ」と神は答えます。男の子は「神様がこんな格好をしているなんて思いもしなかった」と言います。この本ではそうやって一日中、男の子と神様が会話しているのを描き続けています。お話の中で神様は、オムレツが何かも知らないし、泳げないし、台所仕事もできないし、木登りもできない。そうすると男の子が「神様ってこんなことも知らないの」と言います。でも神様は水の上を歩けるし、飛ぶこともできます。二人の登場人物の間に起こるとても優しいお話です。

● ***Alors?* (アロー[さあ]?) / Kitty Crowther 作・絵. Pastel, 2005**

これは赤ちゃんのための本を作ってくださいという注文を受けて描いた本です。私は赤ちゃん絵本を描くのがあまり得意ではありません。赤ちゃんのための本を描くには、特別な才能が必要です。

ページをめくるごとに一人、また一人と登場人物が入ってきて、その度に「それで？」と尋ねると、中にいた人が「まだ」とか「うーん」とか答えます。そうやって「それでそれで？」「うーん、まだ」の受け答えが続いていきます。そして最後、「シー、静かにして、音が聞こえた！」と一人が声をあげ、そのあとで赤ちゃんが入ってきます。そして「さあみんな、ねんねだよ」と、赤ちゃんが声をかけ、みんなで眠るのです。

私は、人間が動物の格好をしているのか、動物が人間の格好をしているのか、その境目が曖昧な登場人物を描くのが好きです。よく「これ何なの」と聞かれますが、そう言われても「知らない」と答えるしかありません。

● 『*にわにいるのは、だあれ? : パパとミーヌ*』(*Poka et Mine*) (キティ・クローザー作・絵、徳間書店、2008年)

もしこの主人公を、うさちゃんとか猫ちゃんとかそういうので描いていたらもっと売れたと思うのですが、私は虫で描いてみたくなりました。その虫の世界ではどんな服を着るのかなとか、どんなお家に住んでいるのかなとか想像しながら、描きました。ごくごく普通の生活に光を当てたようなものです。

しばしば、自分で子どもを持ったら絵がよくなるのではないかとか、絵本がもっとよく描けるようになるのではないかとか、編集者さんからも言われることがありますが、私は私の中にいる、子どもだった頃の自分を想いながら絵本を作っています。

私はトーベ・ヤンソンが大好きで、彼女のようなお話を作りたいと思いました。トーベ・ヤンソンの本で好きなのは、どこか心配げな不安げな雰囲気が漂っているところです。この虫たちを描いたときに、心配しているとか、喜んでいるとか、そういう顔の表情は目と体つきで表すしかありませんでした。

● ***Annie du lac* (湖のアニー) / Kitty Crowther 作・絵. Ecole des loisirs, 2009**

しばらくスライドで、この本のイラストをいくつか流していきます。時に、絵本を文章なしで、イラストのみを見ていくのも面白いので。どうぞお好きなように解釈してください。お家に帰ってあなたたち自身でお話をつけてくださっても結構です。

スライドの最後に御覧いただいた一連の写真は、私がコミュニオーテ・フランセーズの賞 (Le Grand prix triennal de Littérature de jeunesse de la Communauté française de Belgique) を受けたときに作ったものです。どういうものから自分がインスピレーションを得るとか、自分の好きな絵とか、子どもの絵であるとか、そういうものをまとめて展示しました。

お聞きくださってありがとうございました。